

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：32708

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520112

研究課題名（和文） 環境美学における自然美の哲学的基礎付け

研究課題名（英文） Philosophical Basis of Natural Beauty in Environmental Aesthetics

研究代表者

平山 敬二（HIRAYAMA KEIJI）

東京工芸大学・芸術学部・教授

研究者番号：50189867

研究成果の概要（和文）：自然及び自然美についての美学的研究と倫理学的研究との相互協力により、従来の美学の枠組みを超えた環境美学構築のための意義ある新たな展望への一端を開くことができた。自然美は、自然概念の異なる二つの側面、すなわち眼に見え知覚され得る現象的自然としての側面と、そのような眼に見える現象という覆いの下に横たわっている、それ自身は決して姿を現さない理想的自然としての側面との両者の橋渡しをするものであり、われわれの広義の意味での「善き生」のために欠かすことのできない基盤を形成するものであることが解明された。

研究成果の概要（英文）：By mutual cooperation of the aesthetical studies and the ethical studies on nature and natural beauty, we were able to get at least some idea of the new significant prospect for the construction of environmental aesthetics which is not limited to the aesthetics as usual. It was elucidated that natural beauty forms the indispensable basis for our “good life” in a broad sense and intermediates between the two different aspects of the concept of nature, namely, the aspect as the phenomenal nature which is visible and perceptible, and the aspect as the conceptual nature which lies under the cover of such visible phenomena and never shows its own figure.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：自然美、環境美学、自然美学、ゼール、バーム、環境倫理学、自然、美学

1. 研究開始当初の背景

地球的規模における自然環境破壊の深刻な問題に直面している現在、環境美学の学問的確立は、美学の分野における緊急の課題である。文明の急速な進歩は他面においては自然

の急激な破壊であり、そこに生じてくる環境問題は、自然を一方向的に支配し利用しようとする人類と地球的自然との不調和を意味するだけでなく、結局においては人類生存の基盤である地球的自然それ自体の破壊による人類

そのものの生存の危機へと繋がり得るものであることが誰の目にも明らかとなってきた。この現代及び将来に亘る環境問題の解決に向けて、科学技術や社会政策の分野において、新たな研究開発や従来の施策についての再検討が急がれており、同様に現代芸術の分野においても、この環境問題の解決に向けたアプローチが重要な課題の一つとなっている。美学・芸術学の分野においても、環境美学という研究分野の重要性が近年ますます認識されつつあるが、その環境美学における極めて重要な研究課題が「自然美」に関する研究であると考えられる。現代における環境問題の根本課題は「自然と人間との関係性の再構築」であると考えられるが、美学・芸術学の立場でこの問題を捉えようとする場合、従来の真・善・美を分立的に捉える近代美学・芸術学の在り方を基礎としつつも、それらを超えたより総合的な考察を欠かすことができない。特に「善き生」を探究する倫理学と美学との結節点において自然及び自然美の問題を再考することが環境美学における自然美の基礎付けにおいて是非必要であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、この現代的な課題に寄与すべく、環境美学の確立にとって最重要課題の一つと思われる自然および自然美についての哲学的思想的基礎付けの可能性を、哲学的倫理学的研究との連携によって探究し、従来の美学・芸術学の枠を越えたより包括的な環境美学の視点を確立しようとするものである。「自然美」についての哲学的美学的研究に関して、近年特に注目されているものとして、ドイツにおけるゲルノート・ベーメとマルティン・ゼールの諸研究が挙げられるが、この両者とも従来の美学の枠を越えたより広い哲学的自然美研究および倫理学的自然美研究の必要性を主張している。今回の本研究課題は、カントからヘーゲルに至る伝統的なドイツの哲学的美学思想の研究を基礎としながら、現代ドイツ哲学界における新たな自然美研究の学術的背景を踏まえつつ、従来の環境美学研究の枠を越えたより広い視点からの自然美の哲学的解明とその基礎付けを目指したものである。

3. 研究の方法

本研究は、美学的芸術学的研究と哲学的倫理学的研究との相互協力の下に自然美についての哲学的思想的研究を展開し、従来の美学の枠組みを超えた新たな環境美学への展望を確立しようとするものである。そのため

に、本研究の基本的研究体制は、美学芸術学研究者3名と哲学倫理学研究者3名の合計6名（内2名は連携研究者及び研究協力者）の研究者によって構成された。本研究期間は3年間を予定し、その年次計画は第1年次の基礎的研究期間、第2年次の発展的研究期間、第3年次の総合的研究期間に分けられた。

(1) 平成21年度（基礎的研究期間）

第1年度においては、現在もっとも注目されている前記のゲルノート・ベーメおよびマルティン・ゼールの哲学的自然美論について定期的に研究会を開き、哲学的自然美論についての現代における基本的な問題点について共通認識を確保することに努めた。美学芸術学の研究協力者である阿部美由起（玉川大学非常勤講師）はゲルノート・ベーメの専門研究者として、また哲学倫理学の研究協力者である高畑祐人（南山大学非常勤講師）はマルティン・ゼールの専門研究者として本研究における研究協力の役割を果たした。また古典的な重要性を有するカント、シラー、ヘーゲルの自然美論と現代におけるベーメやゼールの自然美論との関連や相違については、研究代表者平山敬二および研究分担者加藤泰史・宮島光志・小川真人がそれぞれの専門研究の立場から問題点の整理と検討を行った。これらの共同研究を進めるために、平成21年8月と平成22年2月にそれぞれ2日間に亘る計4日間の集中的な合同研究会を開催した。また研究上の必要からベンヤミン研究者の長澤麻子（立命館大学准教授）とカント研究者の田中綾乃（三重大学准教授）の2名を研究協力者として合同研究会に招聘した。

(2) 平成22年度（発展的研究期間）

第2年度においては、第1年度においてなされた伝統的自然美論および現代的自然美論、美学芸術学的自然美論および哲学倫理学的自然美論についてのそれぞれの研究成果を踏まえつつ、さらにそれら相互の比較対照研究を経て、現代の環境論において有効に機能する総合的な自然美の哲学的美学的基礎付けが試みられた。その過程で、マルティン・ゼールの著書『自然美学』の重要性が再認識され、各研究分担者と研究協力者がそれぞれ分担する形でゼール著『自然美学』をドイツ語原典に沿ってより丁寧に研究していく方法を取ることにし、その研究成果を合同研究会においてそれぞれ発表していった。また当初の計画に基づいて、研究代表者の平山、研究分担者の加藤・小川の3名でフランクフルト大学にゼール教授を訪問し、当地でゼール教授の『自然美学』についてのコロキウムを開催した。

(3) 平成23年度（総合的研究期間）

第3年度においては、当初第2年度までにおいて新たに基礎づけられると予想された自然美論をもとにさらに野生動物保護等をも含む自然保護論や景観保護論等とも連関する総合的研究を目指していたが、第2年度においてゼールの『自然美学』研究に予定を超える努力と時間が必要であることまたわれわれの研究課題にとってのその重要さが明らかとなったために、当初の予定を変更し、さらに第3年度においても引き続きゼールの自然美論研究を各自の分担と協力によって進めることとした。各自の研究協力はこれまでと同様にメール等でのやり取りの他、平成23年8月及び平成24年2月に計3日間に及ぶ合同研究会を開催した。

4. 研究成果

本研究課題は、美学的芸術学的研究と哲学的倫理学的研究との相互協力の下に自然美についての哲学的思想的研究を展開し、従来の美学の枠組みを超えた新たな環境美学への展望を確立しようとするものであった。また一方では伝統的なドイツ哲学における自然美論研究と現代ドイツ哲学における自然美論研究とを対比させつつ、両者についての学問的吟味の中から、現代においてより説得力のある哲学的自然美論を提示することにあつた。そのために研究体制も美学・芸術学の専門研究者と哲学・倫理学の専門研究者、また伝統的哲学研究にキャリアを有する研究者と現代哲学研究にキャリアを有する研究者の相互協力を前提として組織された。3年度に亘る本研究は、基本的に当初の研究計画通りに進められ、毎年度に定期的な実施された合同研究会を通して、単独での研究では不可能な極めて有意義な相互啓発に満ちた共同研究が遂行され、その点においては大きな成果を上げたといえる。ただし第2年度目以降において、現代ドイツのマルティン・ゼールの『自然美学』の研究に多くの時間と労力を費やすことになり、最終年度の第3年度末までに当初予定されていたような研究成果を纏め上げるには至らなかった。しかしそこで積み重ねられた研究は大変貴重なものであり、今後の日本における哲学的自然美論研究にとって極めて有意義なものとなるに違いないと確信される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計17件)

1) 平山敬二、「フリードリヒ・シラーの美学思想における自然再生の論理」、東京工芸大学

芸術学部紀要『芸術世界』、査読有、第18号、2012年、21-30頁。

2) 田中綾乃、「カントの因果論を巡って」、『論集』第15号(三重大学人文学部 哲学・思想学系)、査読無、2012年、89-97頁。

3) 加藤泰史・高畑祐人、「クレプスの自然倫理学構想と価値の問題」、『自然倫理学—ひとつの見取り図』、査読無、2011年、266-276頁。

4) 宮島光志・森芳周、「環境倫理と生命倫理を架橋する包括的 QOL 概念に関する臨床哲学的考察」、『日本海地域の自然と環境』(福井大学地域環境研究教育センター紀要)、査読無、巻18、2011年、99-111頁。

5) 小川真人、「山口誠一著『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』(評論)、『ヘーゲル哲学研究』、査読有、巻17、2011年、190-193頁。

6) 平山敬二、「ドイツにおけるメディア芸術教育—ワイマールバウハウス大学の場合—」、『東京工芸大学大学院芸術学研究科メディアコンテンツ研究センター活動年報』、査読無、Vol. 6、2011年、2-8頁。

7) 長澤麻子、「越境者の権利—ローゼ・アウスレンダーの生涯から」、『教育諸学研究』、査読有、巻25、2011年、105-126頁。

8) 加藤泰史、「『現代社会における「尊厳の毀損」としての貧困』への補足—CC 概念の予備的考察」、南山大学編『アカデミア』人文・社会科学編、査読無、第91号、2010年、335-345頁。

9) 加藤泰史、「創刊の辞、あるいは純粹哲学と応用倫理学の関係」、ドイツ応用倫理学研究会編『ドイツ応用倫理学研究』、査読無、創刊号、2010年、v-viii頁。

10) 阿部美由起、「ゲルノート・ベーメの自然美学—近代批判と「新しい」美学—」、『ボローニャプロセス以後の欧米を中心とした大学制度の変貌と新しい学問状況』(2009年度南山大学地域研究センター共同研究助成による研究成果報告書)、査読無、2010年、33-44頁。

11) 長澤麻子、「ヴァルター・ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』におけるアレゴリーと〈歴史〉」、『教育諸学研究』、査読有、巻24、2010年、3-18頁。

12) 田中綾乃、「機知と反省的判断力の関係—カント「人間学講義録」の意義—」、『論集』第14号(三重大学人文学部 哲学・思想学系)、査読無、2010年、113-128頁。

13) 加藤泰史、「現代社会における「尊厳の毀損」としての貧困—格差・平等・国家へのカント的アプローチ—」、日本哲学会編『哲学』、査読無、第60号、2009年、9-31頁。

14) 小川真人、「メディア芸術と反復—ループ表象について—」、『芸術世界』(東京工芸大学芸術学部紀要)、査読有、第15号、2009年、77-85頁。

- 15) 平山敬二、「映画作品『J. J. ルソーの生涯と思想』解説」、日本18世紀学会年報、査読無、第24号、2009年、35-37頁。
- 16) 田中綾乃、「自然に対する義務と人間中心主義」、『エコ・フィロソフィ研究 Vol. 3』（東洋大学エコフィロソフィ学際研究イニシアティブ）、査読無、2009年、27-36頁。
- 17) 高畑祐人、「自然に対する尊敬はいかなる意味で可能であるか—カント「崇高論」の環境倫理的読解—」、『名古屋大学哲学論集』、査読有、第9号、2009年、27-39頁。

〔学会発表〕(計23件)

- 1) 宮島光志、「『観照の空間としての自然』再考—M.ゼール自然美学研究(9)」、第5回環境美学研究会、2012年2月26日、南山大学(名古屋市)。
- 2) 長澤麻子、「『自然に関する考察の限界』—M.ゼール自然美学研究(10)」、第5回環境美学研究会、2012年2月26日、南山大学(名古屋市)。
- 3) 高畑祐人、「環境倫理から見た「巨大技術(原発)」問題—高木仁三郎のエコロジー思想：その問題点と可能性—」、中部哲学会、2011年9月25日、三重大学。
- 4) 高畑祐人、「『自然美の倫理』—M.ゼール自然美学研究(6)」、第4回環境美学研究会、2011年8月27日、南山大学(名古屋市)。
- 5) 平山敬二、「『芸術の偉大さ』—M.ゼール自然美学研究(5)」、第4回環境美学研究会、2011年8月27日、南山大学(名古屋市)。
- 6) 小川真人、「『自然知覚の時間』—M.ゼール自然美学研究(4)」、第4回環境美学研究会、2011年8月27日、南山大学(名古屋市)。
- 7) 宮島光志、「三木清と“milieu(中間者/環境)”の哲学—多様な「環境」概念をめぐる系譜学的考察」、名古屋哲学研究会・日本思想史部会、2011年8月27日、名古屋市(愛知県)。
- 8) 宮島光志、「主観的幸福のドグマと幸福度指標の逆説性—カント倫理学は試金石に耐えうるか?」、日本倫理学会、2011年8月27日、富山大学(富山県)。
- 9) 宮島光志、「ヒルデガルト医学と現代日本の癒し—補完代替医療と風土性をめぐる体験的考察(招待講演)」、北陸宗教文化学会、2011年7月2日、石川県教育会館(石川県)。
- 10) 平山敬二・加藤泰史・小川真人、Einige Fragen über “Eine Ästhetik der Natur” von Martin Seel、Kolloquium über “Eine Ästhetik der Natur” 28.2.2011、Institut für Philosophie der Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt
- 11) 田中綾乃、「哲学へのいざない—人間中心主義とエコロジー(招聘講演)」、河合塾2010EX

特別講演会、河合塾千種校、2010年9月18日。

- 12) 宮島光志、「『観照の空間としての自然』—M.ゼール自然美学研究(1)」、第3回環境美学研究会、2010年8月1日、東京工芸大学(東京都)。
- 13) 阿部美由起、「『想像力の舞台としての自然』—M.ゼール自然美研究(3)」、第3回環境美学研究会、2010年8月1日、東京工芸大学(東京都)。
- 14) 長澤麻子、「『照応する場としての自然』—M.ゼール自然美研究(2)」、第3回環境美学研究会、2010年7月31日、東京工芸大学(東京都)。
- 15) 加藤泰史、Bioethics in modern Japan: The case for “Dignity of life”、Workshop of the ZiF Research Group “Human Dignity and Medical Technology”: Dignity—Empirical, Cultural, and Normative Dimensions、July 17, 2010、Universität Bielefeld
- 16) 宮島光志、「M.ゼールの“Kontemplation”概念—自然美論を中心として」、第2回環境美学研究会、2010年2月28日、東京工芸大学(東京都)。
- 17) 小川真人、「マルチン・ゼールの『自然美学』における“ästhetisch”の概念」、第2回環境美学研究会、2010年2月28日、東京工芸大学(東京都)。
- 18) 阿部美由起、「『雰囲気』における「自然」—ゲルノート・ベーメによる拡張された自然概念について—」、第2回環境美学研究会、2010年2月27日、東京工芸大学(東京都)。
- 19) 長澤麻子、「美的なもの与伦理的なもの—葛藤—ベンヤミンの『暴力批判論』を手がかりに」、第2回環境美学研究会、2010年2月27日、東京工芸大学(東京都)。
- 20) 宮島光志、「実践的幸福論としてのカント人間学」、日本カント協会第34回学会、2009年11月21日、東京(立正大学)。
- 21) 阿部美由起、「ゲルノート・ベーメの自然美学」、「ボローニャプロセス以後の欧米を中心とした大学制度の変貌と新しい学問状況」研究会、2009年11月7日、南山大学(愛知県)。
- 22) 高畑祐人、「自然に対する情感的関わりの倫理的含意—マルチン・ゼールの自然美学：概説と評価」、第1回環境美学研究会、2009年8月10日、東京工芸大学(東京都)。
- 23) 加藤泰史、「現代社会における「尊厳の毀損」としての貧困」、第68回日本哲学会大会、2009年5月16日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都)。

〔図書〕(計5件)

- 1) 加藤泰史・高畑祐人(訳)、みすず書房、『アンダーリカ・クレプス『自然倫理学—ひ

- とつの見取り図』、2011年、312頁。
- 2) 加藤泰史 (監訳・解説)、晃洋書房、G. シェーンリッヒ『カントと討議倫理学の問題ー討議倫理学の限界と究極的基礎づけの価値/代償についてー』、2010年、248頁。
- 3) 田中綾乃、『エコ・フィロソフィ入門ーサステイナブルな知と行為の創出』(共著)、「ヨーロッパの自然観と基本姿勢」(担当執筆)、ノンブル社、2010年、81-97頁。
- 4) 阿部美由起 (本文構成・執筆)、『アルチンボルド(週間西洋絵画の巨匠)』、小学館、2009年、43頁。
- 5) 入江幸男、加藤泰史、他 (共著)、ミネルヴァ書房、『グローバルエシックス』、2009年、202頁 (入江:151-176頁、加藤:65-92頁)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平山 敬二 (HIRAYAMA KEIJI)
東京工芸大学・芸術学部・教授
研究者番号：50189867

(2) 研究分担者

加藤 泰史 (KATO YASUSHI)
南山大学・外国学部・教授
研究者番号：90183780
宮島 光志 (MIYAJIMA MITSUSHI)
福井大学・医学部・准教授
研究者番号：90229857
小川 真人 (OGAWA MASATO)
東京工芸大学・芸術学部・准教授
研究者番号：30339808

(3) 連携研究者

阿部 美由起 (ABE MIYUKI)
玉川大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号：70534725

(4) 研究協力者

長澤 麻子 (NAGASAWA ASAKO)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：30611628
田中 綾乃 (TANAKA AYANO)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：70528760
高畑 祐人 (TAKAHATA YUTO)
南山大学・外国学部・非常勤講師
研究者番号：なし